

### 『コーチ・カーター』

2005年／アメリカ／トーマス・カーター監督作品

### 恐れているもの

会員 飯嶋 太郎 (73期)



「コーチ・カーター」  
DVD：1,572円（税込）  
発売元：NBCユニバーサル・エンターテイメント

#### 1 「恐れているものは何か」

弱小バスケットボール部のコーチに就任したカーター。同校の学生は大半が大学に進学できず、生活態度も荒れていた。そこでカーターは部員たちに対し学業との両立を約束させ、身だしなみや言葉遣いも正すよう徹底して指導した。そんな中、部内で一番の問題児である部員クルーズに向けて、カーターは何度も同じ問いを発し続けていた。それが「恐れているものは何か」であった。

自分ならどう答えるだろうか。失敗すること。負けること。馬鹿にされること。怒られること。無力であると知ること。。。

カーターからのこの問いに対し、クルーズは何も答えられずにいた。学外では犯罪に手を染め、何度も退部と復帰を繰り返すといった問題行動ばかり起こすクルーズに対し、カーターが何度も何度も同じ質問をした意図はなんだったのか。

2 カーターは、部員たちの担任教師に対し一定期間ごとに部員たちの成績を開示するよう求め、部員たちが当初カーターとの間で合意した学業成績を下回ると、合意した成績に上がるまで体育館を封鎖し、練習の中止はおろか試合すらも棄権をするといった行動に出る。一見やりすぎともとれるこの行動の裏には、部員たちがバスケットボール選手である前に学生であるため最低限の学力を身に付けさせ、また同校の学生たちが統計的に犯罪に巻き込まれる確率が高いため規律を遵守することの大切さを体感させるといった意図があった。

はじめは部員たちからも反感を買いチームは崩壊しかけたが、次第に部員たち自身がカーターの意図をくみ取り、最終的には自発的に勉学に励むように

なった。また、チームとしても勝ち星を積み重ね、上位ブロック大会に出場するなど強豪校へと成長していった。カーターが率いた弱小チームは強豪校へと変化し、それまで子供であった部員たちは大人へと成長したのである。

3 さて、大人へと成長したクルーズはカーターからの間に対し次のように答えた。

「俺たちが恐れているものは、自分たちの計り知れない力だ。自分の闇ではなく、輝きが怖い。でも、周囲の人を不安にさせないように自分の輝きを隠してはダメだ。俺たちは光り輝くべきなんだ。俺たちが明るく輝けば、みんなも明るく輝く。恐れから解放されれば、みんなの恐れを消し去ることができる」

「恐れ」という言葉からは消極的・否定的な言葉が連想されがちであるが、驚くべきことにクルーズが恐れていたのは自身の「輝き」であった。

クルーズの回答は「一隅を照らす」という最澄の言葉にもあてはまるようだ。どのような環境においても与えられた環境でひたむきに努力を惜しまず自分の役割を全うする。この謙虚な心こそ宝であり、大切にすべきである。そういった意味が込められている。

4 この映画を私が初めて観たのは高校生のとき。当時はまさにクルーズたちと同じ立場であった。次に観たのは高校陸上部の外部コーチとして委嘱を受けたとき。このときはカーターと同じ立場であった。そして今。どちらの立場も経験し、弁護士としてクライアントを目標達成に導くいわばコーチとしてひたむきに自分の役割を全うしている。一隅を照らす存在となるべく光り輝いている。